

空白の埋め方——川端康成『有難う』

田中裕之

一

『掌の小説』の中でも評価の高い一編である「有難う」^①。この作品における最大の問題は、全五節からなる作品の三節と四節の間、通常の小説であれば最大の山場にもなるであろう場面が全く描かれていない、ということにある。売られようとする娘とその母親を乗せた定期乗合自動車、目的地の停車場に到着する。そこから次の日の朝までに、どのような出来事があったのか。読者は、前後の文章から、想像力でこの空白を埋めるべく要請されるのだ。

これまで、この空白がどのように埋められてきたのかを確認してみよう。早くには、三島由紀夫が次のように述べていた。

「有難う」といふ作品は掌小説のなかですぐれたものの一つである。母に連れられて売られにゆく少女が、その途中で、自分たちが乗つて行つたバスの運転手と凶らずも結ばれるといふ話。この思ひがけない結末を作中の人物も作者も皆の目がやさしくゆるしてゐる。娘を売りにゆく母親も、売られにゆく娘も、やがてその夫となる運転手も、運命に対して極度に純潔な人々である。到底、運命に抗争するといふやうな人柄ではない^②。

三島は、この夜に運転手と娘が母親の願い通りに結ばれ、後には夫婦となると読んだのだ。『有難う』を評価する作家は多いが、三島のほかには、この空白をどのように埋めたのかを明らかにしているものはいない。

長い年月を隔てた後、今度は文学研究の領域でこの空白が問題とされることになる。

まず、石川則夫「読者を収奪する言語装置——川端康成『有難う』の〈省略〉——」^③が、そのタイトル通り、この作品の空白（〈省略〉）に焦点を当てる。ただし、石川は、「読者を一晚の空白の中に閉じ込めたまま、『有難う』本文は、再び『半島の南の端の港に帰』ってしまう。空白から出ようとするなら、運転台に思い切つて座つてしまう以外にない。どちらかを

選べ、と『有難う』の〈省略〉は読みを唆す。あるいは読者は、『有難う』の〈省略〉によって逆に読まれる対象とされてしまう」と、空白の効果には言及するものの、当の「読み」を明らかにしてはいない。

続いて、野末明「『有難う』論——「乗合自動車」の表す意味——」^④が、「翌朝「娘」は「運転手」のものになってしまふ。「母親」の立場からすれば「運転手」への過度の信頼が裏目に出たというべきだろう」と、三島と同じく、娘と運転手が結ばれたとする読みを提出している。ただし、野末の場合は、二人の未来についての言及はない。というよりも、野末はここで、川端の『松葉杖』^⑤を参照しながら、「いわば、田舎の乗合自動車の運転手は、都会からの物資や情報を伝える都会と田舎をつなぐ媒介者でありかつ、「兵士のやう」な服装の権威的存在で、若い女性の憧れの対象であったが、反面その権威を利用して女性を誘惑する危険な存在であった。」「権威的存在としての「運転手」の二面性がこの作品には隠されているのだから、二人の結婚などは考え難いということになる。

鄭香在「掌の小説『有難う』と映画『有りがたうさん』——暗示性と明示性について——」^⑥は、「娘の思いを感じた母親が運転手に娘と一晩ともにすることを仄めかしたのを見ると、おそらく二人は夜をともしたと考えられる」とするものの、「一番大きな謎である夜のこととも推測は出来ても、それは推測に過ぎない。空白のまま残っている。そしてその空白を埋めること、謎に対する解釈は読者に委ねられている」と述べるにとどめている。

張月環「川端康成の『有難う』の遠近」^⑦は、「ただ娘に運転手と一夜を過ごさせただけで、娘の運命が変わる。母は素直に二人の感情を受け取り、娘を家に置くことにして春まで待つと運転手に約束した。」「『有難う』はただ有難うさんの口から言った「ありがたう」だけではなく、娘を助けることができ、その上、恋の芽が出来、お互いに愛情を新たに発見することができ、これは本当に有難いことだというのが作品の真意ではないか」と

する。これは、三島の読みを踏襲したものと云ってよいだろう。

森晴雄「『有難う』——乗合自動車の日常」^⑧は、「夜を共にして、運転手への思いはますます深まっていく」娘に対して、運転手は「いくら生真面目だといつても、娘を救うために結婚することなど思いも寄らないであろう。母親を叱つても、自分が責任を持って娘や娘の家族の生活の面倒を見ることなど考えもしないだろう」とする。娘と運転手は結ばれたが、二人の結婚などは考えられないとするもので、野末の論に近い。もつとも、森は野末同様に『松葉杖』を参照するものの、運転手を「危険な存在」とまではせず、彼は「前夜、親子の望みを受け入れて、一時的な善行を施したのである」と読んでいる。また、「母親や娘もまた、彼との結婚を望むことなど考えもしないだろう」とし、「こんどいい時候になったらこの子は家におけんのぢやよ。」という母親の言葉をも根拠として、三島の二人が結婚するとした読みを否定、それは後の映画『有りがたうさん』^⑨の影響であらうとしている。

高比良直美「『有難う』——野山に満たされる感謝——」^⑩は、これまでもとは全く異なつた空白の埋め方をする。高比良は、「母親のおろかな願い」は「拒否された」と読むのだ。「運転手が娘の母親を叱ることが出来たのは、一夜の申し出を断り、娘と何事もなかったからだ」というのが、その最大の理由である。

この空白に言及したもつとも新しい論である山崎甲一「川端康成の『有難う』——『三人』の巡り合わせ、いい運」^⑪でも、「この運転手はドンファンでも女遊びをする様な男でもない。その種の人間とはおよそ無縁な人物・人柄として描かれて」おり、「このような運転手の描かれ方からして、母親が『願ひ』望んだような、娘と共にする一夜など、到底在り得ない」とする。「仮に母親の望むところを聞き入れて娘と一夜を共にしたとすれば、翌朝手の平を返すように態度を変えて、母親に『叱』責する様な矛盾したことは有り得ないからである」と、運転手から母親への叱責を根拠とするのも、高比良と同様である。

なお、二人の未来については、高比良も山崎も語ろうとはしない。二人の間に「何事もなかった」のなら当然と言えようか。山崎は、「後日談は、この作品で作者が問おうとした事柄の領分外のこと、後日談を詮索好きな読者が、作者の領分外のことまで求めようとすることからに過ぎない」と述べ

ている。

二

以上が、作品の三節と四節の間にある空白の埋め方、すなわち、定期乗合自動車が停車場についてから次の日の朝までにどのような出来事があったと読むか、という一点に絞った研究史である。大きな流れとしては、娘と運転手が結ばれ、いずれは結婚に至る関係を構築した、とする読みから、そもそもこの夜に二人が結ばれたなどということはない、とする読みへと移行してきていることがわかる。

三島由紀夫らの、当の夜、停車場近くの木賃宿で二人が結ばれたという読みには、やはり無理がある。理由は、高比良・山崎両氏が指摘する通り、「今朝になつてこの子には泣かれるし、お前さんには叱られるし。」という母親の言葉である。たとえそれが母親の頼みによるものであり、本人が望むものであったとしても、娘と関係を持った後であるならば、最初の客となつたに等しい男に、娘を売る母親を叱る資格はあるまい。ここで母親を叱ることができるとすれば、よほど面の皮の厚い男だということになるが、「有難うさん」という愛称を持つこの運転手の言動のどこを取ってみても、そのような悪しき側面を窺わせるようなものは見つからない。

『松葉杖』を参照して「有難うさん」の二面性を指摘することも妥当ではない。「山の人達にとつては、乗合自動車が遠い花やかな都会の象徴のやうに思はれる」ために「乗合の運転手が、まるで都会の飛行家やスポオツマンのやうに人気があ」り、「そんな風だから、運転手には自然とにやけた女たらしのやうな男が多くなる。彼等は途中の村々で乗客を拾ふやうに、娘を拾ふことばかり考へてゐる。停車場の町の居酒屋の女から覚えた手管を、村の娘にも用ゐようとする」というのが一般的な運転手像であつたとしても、「有難うさん」はそのような運転手ではなかつたというだけの話である。『松葉杖』を参照するのであれば、そのような運転手ではない希有な存在だからこそ、母親は「有難うさんに連れて行つてもらふんなら、この子もい運にめぐり合えるぢやろ。」と言うのだ、と考えるべきだろう。「十分間に三十台の車を追ひ越しても、

礼儀を欠かさない。百里を疾走しても端正な姿を崩さない。それが真直ぐな杉の木のように素朴で自然である」のが「有難うさん」なのだから。そもそも『松葉杖』にしても、そこに登場する清二は、「さういふ男たちのなかで」「特別に品行がよく、道々の村人達にも一番信用されてゐた」運転手であった。清二こそが「有難うさん」の後継者なのだ。

娘と運転手は結ばれてなどいない。だがそれは、高比良・山崎両氏の空白の埋め方をそのまま肯定するものではない。高比良は、二人が結ばれたという読みを正しく否定するが、次のようにも述べている。

母親の「思いやり」から運転手に声を掛けて、申し出を断られる。運転手は事情をはつきりと知ったが、口出しをする立場にはない。運転手もいつものように木賃宿に泊まり翌日は下田に引き返す予定だ。しかし、朝になり、それぞれに出立する時刻が迫ると、娘は泣き出す。運転手は、そこで初めて母親に意見したのだろう。「いいかい、春までぢやよ」と娘に釘を刺しているが、娘にとって家に帰れる嬉しさに変りはない。そのあとのことはその時のことだ。母親も、ぶつぶつ言いながらさほど深刻な様子はない。

高比良の読みでは、母親の申し出はその場で断られ、運転手は「いつものように木賃宿に泊まり」翌日を迎えている。そして朝、昨夜すでに、「どうせ明日から見も知らない人様の慰み物になるんぢやもの。」という母親の言葉で「事情をはつきりと知つていた運転手は、「泣き出す」娘を目の前にして、母親に意見することになる。前日は「口出しをする立場にはない」と考え、母の願いも断っていた運転手が、翌日は態度を大きく変えるのだ。娘の涙にそこまでの力があつたということになるのだろうか。

この点については、山崎が、「当初この運転手が「傍の娘を見て」あえて「黙つてゐ」たのも、そして母親のコトバに「黙つてうなづ」いていたのも、偏に、肝心な娘本人の気持が確認できなかったがため」であり、娘が「翌朝になって、「有難うさん」に出会う迄それまで押し殺していた自身の正直な本当の思いを、初めて「泣き出す」ことで意志を明確に現わした」ことで、「娘のその本心をしっかりと確認した」運転手は、「今度は母親を「叱」つていく」という「判断・行動」に出たのだ、との読みを提示している。涙によって娘の真意を知ったことが運転手を

動かしたというわけである。

確かに、山崎が指摘するように、「作中に娘のコトバは一切無」く、「娘の動作・行動のみで娘の気持、心が代弁されている」のだから、涙以上に雄弁なものはないかもしれない。だが、そもそも運転手は、どのような経緯でこの涙を眼にすることになったのだろうか。

泊まったのが木賃宿であるからには、大人数用の部屋で三人一緒に他の泊り客とともに、という可能性もありはするのだが、「もうそろそろ冬」という時期の話であり、多くの泊り客がいたとは思えない。乗合自動車は運転手は、それが誰であれ、折り返し地点にあるこの木賃宿に泊まることになっている、と考えるのが自然だろう。また、娘の一夜の相手をしてほしいと運転手に頼む母親が、この二人と同室で寝るとは考え難い。以上を勘案すれば、この日、運転手は一人で一室を使用し、母親は別の一室（ここには別の客がいる可能性はある）を使用するはずであつたが、母親は娘のことを「思いやり」、運転手に「手を合はせて拌み」、彼女を運転手の部屋に行かせようとした、ということになる。したがって、運転手が母親の願いを断つたのであれば、当初の予定通り、運転手と母親は別々の部屋で一夜を過ごしたことになる。高比良が言う「運転手もいつものように木賃宿に泊まり」とは、このことを意味しているだろう。だが、そうであるなら、高比良自身「それぞれに出立する時刻が迫ると」と言っているように、少なくとも起床時には、両者の目的地は別だったはずなのだ。運転手は当然再び「半島の南の端の港」（下田ではない）^⑩へ、母親はこの「汽車のある町」のどこかへ、である。そうであるなら、「出立する時刻」も別であり、三人が一緒に木賃宿から出てくるためには、誰かが積極的に、あえて一緒になるように動かなければならぬはずなのだ。この状況で、誰がそのようなことをするのだろうか。

運転手と母親が別々の部屋にいたと見るのは不自然である。運転手は娘と同室だったのだ。心優しい「有難うさん」は母親の願いを断り切れなかった、というのが正しいだろう。

ただし、高比良と同様に、二人が結ばれたという読みを否定する山崎は、この宿泊の状況については、高比良とは異なる読みをしているようである。「ようである」と歯切れの悪い文章になってしまふのは、山崎

論文では、そこがはっきりと書かれていないからである。先に引用したように、「翌朝になつて」、「初めて「泣」き出すことで意志を明確に現わした娘」、「娘のその本心をしっかりと確認した」運転手、とされていることからしても、「一」で確認した、二人が結ばれたとする読みを否定する文章からしても、山崎の論では、運転手と母娘は別々の部屋で一夜を過ごしたことになるはずだと思われるのだが、一方で山崎は、「当夜に何事もなく、「手を合はせて拝み」倒そうとした母親の「願ひ」がその様にはならず、に終つた、「次の日の明け方」になつてみれば、その「願ひ」が一方的、独断的で、肝心な「この子」の気持と運転手の思い、双方の心というものを無視した凶らいであつたに過ぎないことが明白となる。「この子」の母親としての浅慮、不覚、恥ずべき誘い方であつたことを痛感することになる」とも述べているのだ。「母親としての浅慮、不覚、そして恥ずべき誘い方であつたことが、何事もなかつた当夜が「明け」ること、明白となつた」との文章もある。これらからは、山崎が「在り得ない」とする「共の一夜」とは、あくまでも二人が身体の関係を持つた「一夜」であつて、私の読みと同様に、運転手と娘は同室で一夜を明かしたと読んでいるのでは、とも思われるのだ。

だが、もし山崎が、二人は同室でこの一夜を明かしたと読んでいるのであれば、先の、娘が「翌朝になつて」、「初めて「泣」き出すことで意志を明確に現わし」、「運転手はその涙で「娘のその本心をしっかりと確認した」という読みは、あまりにも不自然ではないだろうか。「作中に娘のコトバは一切無」く、「娘の動作・行動のみで娘の気持、心が代弁されている」のは確かだが、これは、娘の言葉が書き記されていない(省略されている)ということであつて、二人が一緒にいたなら、当然会話を交わしていたと読むべきだろう。ましてや山崎の場合は、往路の乗合自動車の中の娘について、「明日の身売りを目前に控えた娘が夕刻に、一縷の望みを託し得るのは、もはや、目の前の「有難うさん」以外には無い。(略)「有難うさん」に寄りすがつてみたら、或は、家から「遠くへや」られずに済むかもしれない、母親に「また連れて帰」らせてもらえるかもしれない、という期待と希望が膨らんで来るのは当然のこと」などとも読んでいるのだから、なおさらである。「有難うさん」の側からしても、娘に話しかけずに朝を迎えるなどということは考え難い。さ

らに言えば、もし二人が何も突つ込んだ会話をしないまま翌日を迎えたのであつたなら、運転手が翌朝の娘の涙の意味を読み取ることは、二人が別々の部屋で夜を過ごしたとき以上に難しくなるだろう。母親を叱ることも、娘を売ろうとしていることに対してではなく、二人を同室にしたことに対するものになつてしまふのではあるまいか。

「次の日の明け方、運転手は木賃宿を出て兵士のやうに広場を横切つてゆく。その後から母親と娘がちよこちよこ走りについて行く。」という状況が成立するまでの経緯は、おおよそ次のようにならう。母親に頼まれ、やむを得ず娘と同室になつた「有難うさん」は、その夜、娘の気持を聞くことになる。娘に同情し、母親に意見することを約束した彼は、翌朝、娘とともに母親の部屋を訪れる。そしてそこで、母親からすれば、「今朝になつてこの子には泣かれるし、お前さんには叱られるし。」という事態が到来したのだ。「私の思ひやりがしくじりさ。」という言葉通り、「思ひやり」で娘を「有難うさん」と同室にしたことが、「しくじり」を生んだわけである。すでに見たように、娘と「有難うさん」が結ばれたということは考えられない。だが、二人がじっくりと言葉を交わし、「有難うさん」が娘の気持ちをしっかりと理解し、娘のために母親に意見することを決意する時間、すなわち二人が同室で過ごす時間がなければ、母親は、「私の思ひやりがしくじりさ。」という言葉が発することはできないだろう。やがて乗合自動車の出発の時間が近づき、「有難うさん」は木賃宿を後にする。母娘もそれを追いかけるように木賃宿を出る。この時、三人の目的地はすでに同じである。

三

木賃宿での一夜で、「有難うさん」と娘が結ばれたなどという事実はない。そのような出来事があれば、「有難うさん」は母親を叱責などできはしない。叱責できるということは、そのような出来事はなかつたということだ。だが、二人は同じ部屋で過ごし、会話を交わした。自分の境遇を受け入れ、未来を諦めようとしていた娘には未練が生じ、運転手は娘を救おうと考えた。そして、未来は変わったのだ。

「どりやどりや、またこの子を手を連れてお帰りか。今朝になつてこの

子には泣かれるし、お前さんには叱られるし。私の思ひやりがしくじりさ。連れて帰るには帰るが、いいかい、春までぢやよ。これから寒い時分に出すのは可哀想ぢやから辛抱するけれど、こんどいい時候になつたらこの子は家に置けんのぢやよ。」

「有難うさん」の運転で、母は娘を連れて家に帰る。三島由紀夫の、この後二人が結婚するという読みは、否定されて久しい。二人は木賃宿の一夜に結ばれてなどいないのだから、そのような未来を予想する必要もないだろう。だが、三島がそのように読んだのは、それなりの理由がある。「連れて帰るには帰るが、いいかい、春までぢやよ。」という言葉が、他の誰でもない「有難うさん」に向けられているからだ。高比良は、この言葉を「娘に釘を刺している」と読むが、前後の言葉が明らかに「有難うさん」に向けてのものである以上、この言葉だけを娘に向けたものとするのは無理がある。そもそもこの時、娘は乗合自動車に「先に乗つて唇を擦り合はせながら運転手台の黒い革を撫でてゐる」が、母親は外で「朝寒に袂を合はせてゐて、運転手もまだ外にいる。「一番の汽車が三人の客を自動車に落して行」つた後、「運転台の座布団を正しく直」して、彼は自動車に乗り込むのだ。母親の言葉は、「有難うさん」だけに向けられたものである。二人が結ばれたと読んだ三島は、春までにはきちんとした形を取るよう、母親は彼に釘を刺したと読んだのだろう。

では、二人が結ばれていないのであれば、この「有難うさん」に向けた「いいかい、春までぢやよ。」という言葉はどう解釈すべきなのか。さすがにこの先に結婚を想定するのは飛躍がありすぎる。『松葉杖』には、乗合自動車の運転手について、「運転手は山の新聞とも云へた。途中の村々や、出発地の小さい停車場町で、いろいろの噂話を拾つて来ては、村に伝へる」とも記されている。運転手は情報通であったのだ。とすれば、「有難うさん」は、春までに娘の別の働き口を探してやることを約束した、と考えるのが妥当なところであろう。

前日、乗合自動車に乗り込む前の母親は、「今日はお前さんの番だね。さうかい。有難うさんに連れて行つてもらふんなら、この子もいい運にめぐり合へるぢやよ。いいことのあるしるしぢやよ。」と声をかけていた。ここからは、この母親がこれまでにもこの待合所を利用しており、

この待合所から出発する複数の運転手のことを知っていることが了解されるが、その中で「十五里の街道の馬車や荷車や馬に一番評判のいい運転手」に当たったことを喜んだ母親の思い通りに、確かに娘は「いい運にめぐり合へ」たのだ。

「今年柿の豊作で山の秋が美しい。／半島の南の端の港である。」と始まったこの物語は、「彼は十五里の野山に感謝をいばいにして、半島の南の端の港に帰る。／今年柿の豊作で山の秋が美しい。」と結ばれる。美しく、そして暖かな空気を漂わせて始まった物語は、そこに「ありがとう」の声の重なりと母親の感謝をも加えて、やはり美しく、そして温かく閉じられるのである。

まさに「牧歌的」^③な作品として、『有難う』はある。

注

① 『文藝春秋』一九二五年二月号に「第三短篇集」の一編として発表。その後、『感情裝飾』（金星堂、一九二六年六月）『僕の標本室』（新潮社、一九三〇年四月）以下、すべての自選作品集に収録されていることから、作者自身もお気に入りの一編だと考えられる。他作家からの評判も高く、森晴雄「有難う」——乗合自動車の日常」（『星の広場』二号、室生犀星学会、平成二〇〇七年一〇月、『川端康成』掌の小説』論——「有難う」その他』龍書房、二〇一二年三月、所収）には、『有難う』を高く評価した作家として、上林暁・三島由紀夫・野口富士男・宮本輝・石田衣良が挙げられている。

② 「川端康成論の一方——「作品」について」（『近代文学』一九四九年一月号）。引用は『決定版 三島由紀夫全集27』（新潮社、二〇〇三年二月）に拠る。

③ 『鷗外・康成・鱒二 長谷川泉ゼミナル論文集』（國學院大學大学院長谷川泉ゼミナル編、一九九四年一〇月）。「有難う」の省略というタイトルで『文学言語の探求——記述行為論序説——』（笠間書院、二〇一〇年二月）に収録。

- ④ 『解釈』一九九九年七・八月号。
 ⑤ 『朝日』一九三一年一二月号。
 ⑥ 『川端文学への視界 川端文学研究2003』（二〇〇三年六月）。
 ⑦ 『東アジア日本語教育・日本文化研究』七号（二〇〇四年三月）。
 ⑧ 注①前掲。
 ⑨ 一九三六年公開、松竹キネマ制作・配給、原作・川端康成、監督・清水宏、主演・上原謙。ただし、この映画でも、空白の一夜は描かれていない。
 ⑩ 『芸術至上主義文芸』三五号（二〇〇九年十一月）。
 ⑪ 『芸術至上主義文芸』四三号（二〇一七年十一月）。
 ⑫ 「独影自命 十一」（十六巻本『川端康成全集 第十一巻』一九五〇年八月「あとがき」）において川端は、「『有難う』は下田・大仁間の下田街道、または天城街道であるが、その道は湯ヶ島を通つてゐる」と言いながらも、「しかしこれらの土地はいづれも私の感傷の背景に過ぎなくて、確実に書かれた土地は一つもない」と述べている。
 ⑬ 「独影自命 十一」（注⑫前掲）において川端は、『有難う』を『胡頹子盗人』『万歳』とともに「いくらか牧歌的である」と評している。少なくとも『有難う』に関しては、「いくらか」という譲歩は必要ないだろう。

☆川端康成の小説ならびにエッセイからの引用は、すべて三十七巻本『川端康成全集』（新潮社、一九八〇年二月〜一九八四年五月）に拠り、旧字体は新字体に改めた。